
Angelbeats! HEAVENS BATTLE

フレイムバースト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A n g e l b e a t s ! H E A V E N S B A T T L E

【Nコード】

N 6 4 2 3 Y

【作者名】

フレイムバースト

【あらすじ】

ええー今更ながらAngel Beats!の二次創作を始めました。

まあ頑張って更新していきます。

——あらすじ——

少女は死後の世界で目覚めた。

その死後の世界で少女は幼いときにやさしくしてもらった人に互いに望まぬ再会をする

目覚め（前書き）

まずは第一話

目覚め

「……………あり、ここどこだろ……………学校かな？」

目覚めた時私はなぜか学校（？）の敷地で寝転がっていた。

パン！

乾いた、甲高い音がこだまする

なにかの炸裂音のような、そんな音だった

「！？」

私は恐怖に震えその場に座り込んでしまった

ただ、心の中で私は、自分におまじないをかけていた

小さい頃、よく遊んでもらったお姉ちゃんに教えてもらったおまじないだ

それを無我夢中で心の中で唱え、自分の中の恐怖を消そうとした

「……………怖くない、なにも怖くない、なにも怖くない、なにも怖くない、なにも怖くない、なにも怖くないから……………」

いつの間にか、声に出してそのおまじないを言っていた

そして何分か経った時、銃声が収まった

「……ここ……学校……だよ……?」

少なくともそうである

私はさっきの銃声がなんなのか調べるために、音が聞こえてきた方向に向かって走り出した

数分後

「……これって」

カツ丼の食券が落ちていた。そして、その近くに銃弾が落ちていた。

「おいあんた、なにやってんだ?」

突然、後ろから声をかけられた。

「えっ……」

振り向くとそこには青い髪の毛でチャラそうな男の人がいた

「ん? までよ? こんな夜中にNPCが歩き回る訳がないしな……
あんた、名前は?」

「あ……入野舞と言います」

「入野舞か。じゃ入野、ちったあついてきな」

「はい」

私はその青い髪の毛のチャラそうな男の人についていていた

目覚め（後書き）

いきなり日向登場

死んでたまるか戦線（前書き）

岩沢さんのセリフはトラックゼロと漫画版Angelbeats参照。

では本編どうぞ

死んでたまるか戦線

「……あの」

私は気になる事があるので青い髪の毛の人に声をかけました

「なんだ？ここがどこかみてーな質問なら答えてやるぜ？」

青い髪の毛の人は気楽な態度で返事をしました

「それもありますけどまずあなたの名前が知りたいんですけど……」

「ああ、わり。自己紹介が遅れたな。俺は日向。まあテキトーにヒナっちって呼んでくれ」

「じゃあ日向さん、ここってどこですか？」

「まあ、ざつくばらんに説明するとな、ここは死後の世界だ」

「え……」

ここは死後の世界……？

ならここにいて私は死んでいるの？

「……そ、んな……」

視界が滲み始めた

「おいおい、泣くなよ！死んだのを受け入れられねえのはわかるけどよ！」

「うえええん！」

数分後

「日向くん」

「あ、ゆりっぺ！」

「あまりにも遅いから消えたのかって思ったじゃない」

「そう簡単に消えてたまるかってんだよ」

リボンをしたサツマイモの皮みたいな色の髪の毛をした人がやって来た

「って……あなた女の子を泣かせたの？男としてサイテーね。ねえクビにしている？」

「良いわけあるか。食堂の前で棒立ちしてたから人間だと思って連れていこうとしてただけだ。ただここが死後の世界つつー事を教えたら突然泣き出しちゃったんだが……今は落ち着いたみたいだな」

「そう。……えーと……あなた、名前は。私はゆりよ」

「あ、入野舞です」

「そう、じゃあ舞ちゃん。生きてた頃、武道とかなんかやってた？
剣道とか弓道とか」

「薙刀で全国大会優勝した事が一回、あと高校になってから射撃部に所属して死ぬまで負けなしでした。」

「そ、じゃあついてきなさい、私達の基地に案内するわ」

「基地？」

私の頭の中に、戦闘機やら戦車やら迷彩柄の服を来た人たちが匍匐ほふく前進している絵がなぜか出てきた

「ついたわよ」

「ここって……」

いや……もうなんか職員棟って書かれてたのを見てなんかおかしいなって思っただけどさあ……

「明らかに校長室じゃないですかっ！」

「そうよ？校長先生は職員室にいるから実質もぬけの殻だったから
ありがたく使わせてもらってるわ」

「正確には俺達が職員室に校長先生の席を用意して、そこに移動してもらったんだがな」

「……」

この人達……恐ろしいなあ

「えーっと日向君、暗号いつてちょうだい」

「おう！呪いなんてへのへのかっ「違うだろが！」ひっ！」

ゆりが日向さんにギリギリ当たらないぐらいの場所に銃弾を撃ち込んだ

「……わかったって。神も仏も天使もなし！」

「それでよし」

「すいませんでした」

「今度から気を付けなさいよ？」

ゆりが校長室の扉を開けると、そこにはでっかい斧を振り回してる人やら眼鏡を拭いている人やらギターを持つてる女子がいたりとなんかやんややんやと騒がしかった

「かえったぞー！」

「ただいまー」

「あ、おかえりーゆりっぺー」

たったかたーとやって来たのは何の個性もなく、食べ物で言うなら

大根みたいな人だった

「今日は新しいメンバーを連れてきたから。ほら、でってきつなさ
いっ!」

「わわっ!」

ゆりがそう言ったら私の腕を引っ張り、私を前に引きずり出した

「これはこれは……」

「Oh! What a nice girl!」

へ?今なんて?私中学のとき英語で2を取っちゃったことがあるか
ら全くわかんないんだけど?

「あさはかなり……」

ふえ?なにがあさはかなの?私が?それとも私以外の人達が?

「こりやまた……ひ弱そうなのが来たな」

いやいや!私薙刀で全国大会優勝してるから!かなり運動神経いい
方だから!

「おい、日向、肉うどんの食券を回してくれるんじゃないのか」

いや、あなた既に手にうどん持つてるじゃないですか!っーかさっ
きからしてたこの鰹出汁みたいな匂いはあんたのうどんだったのか!

「ああ、わりーわりー！ほいよつと」

「ところでゆり、次のライブいつになりそうだ？」

「んー、まだ未定よ」

「そりゃまいったな……ライブできねーと私死ぬかもな」

「岩沢さんならそうなりそうね」

おお、ここに音楽キチがいる。

ただ、口には出さないでおこう。生きてた頃、似たようなことを言
って往復ビンタを食らったことがあるし

「ゆりっぺさん、頼まれていたものをお持ちしました」

「おー遊佐の特製揚げ出し豆腐じゃねーか！」

「日向さんに作ったわけではないので」

わお、毒舌&ポーカーフフェイスが決まってるー！

「ありがと、後で食べるわ」

「では、ラップをして保存しておきますね」

「わかったわ」

そう言ったあとゆりがおそらく校長先生が座っていたと思われる椅

子に座り、私の方をみた

「さて、舞ちゃん。あなたさっき薙刀と射撃が得意っていったわね」

「はい」

「だから貴方を戦闘要員としてスカウトしたいんだけど」

「……戦闘要員って……なにと戦うんですか」

「天使、よ。この死後の世界で生徒会長をしてるわ」

「……天使は強いんですか？」

「強いから私は武術に優れている貴方をスカウトしようとしてるんじゃない」

どうやら話を聞いている限りは、天使は相当のやり手のようで、ゆり達は苦戦しているみたいだ。

「……わかりました。そのスカウト、乗ります！」

「話がわかるわね！じゃあ制服渡すから着替えてね」

「」「ゴクリ……！」」「」

今、三人ぐらい生唾を飲み込むような音が聞こえたんだけど……

「ゆり、男子を追い出してほしいんだけど」

「そうね、ほら出てった出てった！男子共！」

ゆりが拳銃を持ち出して、男子を脅し、追い出した

それを確認して、私は制服を脱ぎはじめた

……にしても誰がこんなのを着せたんだろう。

ご丁寧に下着まで……って……！

わ、私この服を着せたやつに裸見られてるじゃん！

「……胸、でかいな」

唐突に、岩沢さんにそう言われた

「へっ？いや邪魔なだけですよ！薙刀振るとき本当に邪魔ですから！」

「ふうん、まあ……ひさ子と同じぐらいだって覚えとく」

「その人も胸大きいんですか？」

「まあな、私とひさ子がガルデモの母体になるバンドを組んだとき、考えてたユニット名が『Fカップ&Bカップバンド』だからな」

「へえ、他にもあるの？」

ゆりが岩沢さんにたずねる

「ああ、『マサ&ヒサ』とか『ヒサ&マサ』とかな、全部ボツになったけど」

「そりやなるわよ、私でもそれよりマシなの思い付くわ。……ってガルデモって誰が思い付いたの？ひさ子さん？」

「あれはな、関根が言った言葉が由来だ。たしか『こいつらは化け物だ……もう私に構わず逃げるんだみゆきちい……』っていうやつ」

「そうなんですか」

「ていうか岩沢さん今日は絶好調ね、珍しく物真似まで疲労しちゃって」

「そうか？」

「あさはかなり」

「椎名さん、それ言い所間違ってるない？」

ゆりの指摘に椎名さんは目を見開いた……と思ったらまた閉じちゃった

「あさはかなり……！」

どうやらこの『あさはかなり』は照れ隠しにも使えるらしい。

「あのー着替え終わりましたけど……」

「そ、ならオス豚どもを入れないとね、入っていいわよ！」

オス豚って……

あなたは女王様ですか。ゆりっぺ。

まあこのグループの中ではリーダー的な存在だとは思っけど。

「……？あれ？高松くんと野田くんとTKは？」

男子の人数が減っている事を不審におもったゆりっぺは日向君にたずねた

「高松は筋トレ、野田のアホは川原でハルバート振り回すって。TKはヘッドスピンしながらどっか行った」

「そ、なら今日は解散！」

「おう！」

日向さんがそういたら校長室にいたメンバーは出ていき、残ったのは私と岩沢さんだけだった

ゆりっぺは鍵を机の上に起きっぱなしにして部屋を出ていった

まあ暗号があるぐらいなんだもん、すっごい仕掛けが扉の前にあったりするんだろな

たとえば合い言葉を言わずに入ろうとしたら下から針山がドーンっ

てなつて血まみれにするとか、上からハブやらタランチュラやらさそりやらコブラとかスズメバチが湧いて出てきたりするんだろつなあ

「……あんだ、いつまでそこにいるのさ」

いろいろ危ない妄想に浸っていた私に岩沢さんが話しかけてきた

「……まあ、朝まで？部屋の番号とか聞いてないし——」

「自分で探せ」

「それに寒い」

さつきまで外で寝転がっていた馬鹿が言うことではないが、そのようなのである。

私は寒いのにめっぼう弱く、冬になるとこたつに入り浸る事が多いのだ

今だつて寒くてしょうがないからカイロとかないかなーなんて思いながら部屋を物色している

「……あんだ、入野舞だっけ？」

「はい」

「面白いやつだから覚えとく。私は岩沢、よろしくな」

「よろしくです、岩沢さん」

私は岩沢さんと握手して……………あ、暖かい手だなあ

「ああ……………」

岩沢さんが手をはなそうとしてるけど私は岩沢さんの手を握って離さない

「……………？いつまで手を握ってるつもりだ？」

「……………はわあゝ岩沢さんの手暖かい。天然カイロだゝ。離れたくなゝい」

「……………はあ……………。（なんかすっぱーなつかれてる……………）」

「にゅゝんゝ」

この日、岩沢さんは私のせいで帰るに帰れないので校長室のソファをベッドにして眠りにつき、私も私で同じようにソファで眠りについた

死んでたまるか戦線（後書き）

漫画版Angelbeats二巻のひさ子さんかわいいですよね。
岩沢さんもボケまくるし

オペレーション・トルネード

私がこの世界にやって来て三日が経った。

この三日間でこの世界の特徴を金髪でツインテールの（ごめん、名前忘れた）揚げ出し豆腐の人から教えてもらった

まず、この世界の住人は人の魂を持った人間と、天使、NPCがいる。

NPCは何の個性もなく、いわばこの世界の学校をさらに学校っぽくするための存在だ

天使は昨日のゆりっぺの説明でたいは理解できたけど戦ってみないとわからない
次に消える、ということについてだ

この世界でまともに授業を受ければ、勝手に報われたことになって成仏しちゃうらしい

この二つの事を説明してもらった

ちなみに私は今何しているかと言うと

「……………んん……………やっぱり朝シャンはいいわ」

シャワータイム中だ

朝シャンは私が生きてた頃に一回だけやったことがあり、そのあと学校に行くとき、風が当たると凄く気持ちいいのだ。夏限定で。

「さてと、スッキリしたからそろそろ出よつと」

そのあと私はSSSの制服をきて校長室に向かった

校長室にて

「あ、舞ちゃん。貴方に渡したいものがあるわ」

そう言ったゆりっぺが壁に立て掛けてあつた薙刀を私にくれた

「ギルドの人達に頼んで作ってもらつたのよ。あとこれも」

そう言つて手渡されたのは拳銃だつた

「スチエッキン・マシンピストルよ。使うときがあれば使いなさい。試し撃ちはしてあるわ」

「わかつた、ありがとねゆりっぺ」

私はピストルを制服の内ポケットに入れて、薙刀を持って壁にもたれ掛かつた

……凄く重いな。この薙刀。柄まで金属じゃないよね？

「さて、今日はオペレーション・トルネードを実行するわ」

トルネード？なにそれ？

「ゆりっぺ、質問いい？」

「舞ちゃんは初めてだから説明するわ。まあざつくばらんいろいろと省略して話すと、一般生徒から食券を巻き上げる!」

「……斬っていいかしら?」

「落ち着きなさい。恐喝とかそういうのはやらないから。平和的手段で、一般生徒が楽しんでいるところを巻き上げるから」

「ええ……」

「まあ、舞ちゃんは初めてだから皆と一緒にの場所に配置してあげるわ、安心しなさい」

「……まあ、いつか。平和的手段なんだから」

まだ若干納得していないが、私はそのトルネードを待つことにした

「はい、今日の作戦概要の説明終了! ヒトハチサンマルの作戦開始時刻に遅れないように! 解散!」

時刻 18:30。オペレーション・トルネード決行時刻

「んゝそろそろだね」

隣で特徴のない人がそう言った。

……あとで名前聞いとかないとなあ。

同じ戦線のメンバーで名前覚えられたのはまだゆりっぺと日向さん

と岩沢さんと野田さんだけだもん

最後のは……インパクトがありすぎたからね。あんなでかいハルバートを持ってたら誰でも覚えられるよ。

そんなことを考えてたら、大食堂の方から音楽がなり始めた

それと同時に、私の目に、銀髪で背丈は私より小さい人が見えた。

「来た！」

まず隣で特徴のない人が発砲。私もピストルを取り出して、そこにいる敵（以後天使と表記）に発砲した。

前者の弾は天使の肩に当たり、私の撃った弾は天使の膝に当たった。

「……ガードスキル、ディストーション」

「うわあ！早速やられた！あのディストーションって奴を発動してる最中は僕達の銃弾を全くうけつけないから気をつけて！」

ご丁寧に解説ありがとう、特徴のない人。

「なら、薙刀で！」

私は先行し、薙刀を振るい、天使の腕を切り裂かんという勢いで薙刀を振り下ろした

「ガードスキル、ハンドソニック」

「……!？」

私の振り下ろした薙刀は天使の腕から出現した光の刃に止められていた。

否、押し返されかけていた

「……凄い怪力っ」

私は天使の足めがけて蹴りを放った

「……ガードスキル、デイレイ」

天使は高速移動してそれを回避して、一旦バックした。

「よく持ちこたえたな!」

「女にしちゃあやるじゃねえか」

しばらくしたら、日向さんや長ドスを持った人、野田さんが援護に来てくれた。

そこから戦線メンバーによる天使に対する一斉掃射が始まった。

私は、ただそれを見ることしかできなかった。

正直なめていた。こんなのは単なる生徒会長と一部の生徒のいざこざだと思っていたけど、目の前で繰り広げられているのは間違いなく戦争だった。

「あ、始まったよ！」

特徴のない人そう言ったとき、上から食券が舞い降りてきた

私が手を伸ばすと三枚の食券が、私の手に舞い降りてきた

その食券はカルボナーラとオムライス、ついでに納豆だった。

「それでいいの？じゃ行くよ！あと納豆はゆりっぺのいないところで食べて！」

「えっ、あっうん！」

私は食堂に向かいながら落ちていた食券を拾い上げていた

「わっ！凄い量！カロリー高そう！」

そう言って近づいて来たのはクセの強そうな髪が腰まである女子だった

「えっと……あなたは……？」

「ああ私？私は関根しおり！ガルデモのベースやってるよ」

「ガルデモ……ああ！さっきの曲の！」

「そーそー！で話戻すけどー量凄すぎない？カツ丼、カルボナーラ、

オムライスにラーメンって！平均でも790カロリーと850カロリーと494カロリーだから……2134カロリー！？……太るよ？」

「大丈夫だよ。薙刀ふってカロリー消費するし！」

「それでもねえ、みゆきちもそう思わない？」

「えっ？いきなり振られても何の話か全く読めないんだけど……」

「えっと……？」

「あつ私は入江みゆきっていうの。ガルデモのドラムやっててしおりんとは相部屋なんだ。この世界でわからないことがあつたら聞きの来てね」

「あ、ありがとう」

「あつ、食事だけで生きてた頃の辛さを吹き飛ばしちゃだめだよ？消えちゃうし」

「うん、わかった。……でもそう簡単に吹き飛ばせそうにないんだ」

「……あ、思い出したくないよね。生きてた頃の事なんか。ごめんね」

「いいですよ、気にしないで。……」

ふと思い出した記憶。狂わされた人生。回りが全て敵に見えて、恐れていた。逃げ惑う日々。そして——目の前に向けられた銃口。

「――」

「となり、いいか？」

「……！？」

聞き覚えのある声、私を可愛がってくれた、あの人の声。

私が八歳の時、先に逝ってしまった、あの人の声だ。

私は恐る恐る、顔を後ろに向けた。

「？ 私の顔になんかついてるか？」

そこに立っていたのは紛れもない、私の知っている、ひさ子お姉ちゃんだった

お姉ちゃんとは私がひさ子お姉ちゃんの事をほんとお姉ちゃんみたいに慕っていたから癖でそう言ってしまう。

「……………ひさ子お姉ちゃん……………」

つい口にだしてしまった。

その瞬間目を見開いたひさ子お姉ちゃんは食事を机においた後、私の肩を掴んできた

「！？ あんたまさか！？」

「……………」

「黙ってないでなんか言えっ！舞！」

「め……………」

「なんだ！？何て言った!？」

「ごめん……………なさい……………」

そう言った後私は大食堂から飛び出した。

「……………ひさ子、あんたあいつの事を知ってるのか？」

岩沢がひさ子に訪ねる。

「知ってるもなにも、あいつは……………」

ひさ子は手を額に押し付け、悩んでいた。

「わり、私、あいつを追いかけてくる！」

額に押し付け、悩んでいたのもつかの間、ひさ子はそう言って駆け出し、大食堂から出ていった。

ヌクモリ（前書き）

舞の生前の話です

ヌクモリ

「ったく……！あいつどこに行っただ」

ひさは学園の中を走り回っていた。

なぜそのような行動に出ているかという、突然、飛び出していった舞を探しているからである。

「まてよ……？」

ひさは立ち止まり、生きていた頃の出来事を思い出した。

まだ舞が小さかった時、飛び出していくことが度々あり、舞の家族と共に舞を探し回った事を思い出した。

「あの時は………たしか公園のベンチの上で泣きつかれて寝てたんだよ………ならベンチを片っ端から探していけば！」

そう考えたひさは、また駆け出した。

「……………ひつぐ」

舞はひさ子の予想通り、ベンチに座って泣いていた。

しかし彼女はもう17歳なのだ。ひさに遊んでもらっていた頃とは違う

小さかった頃の彼女は家を飛び出しては公園のベンチで泣きじゃくり、寝てしまったりしていたが、なぜいつもベンチにいたか。

理由は簡単である。

そのときの彼女が一人で行けるのは、家の近所の公園だけだったからである

舞は直にここにひさ子がやって来ると考え、ベンチから立ち上がり、移動しようとしたが……………

「見つけたぞ、舞」

背中からかけられた声に固まってしまった。

「……………わかつちゃうよね……………私が逃げるところなんか」

「ああ、まるわかりだ」

「……………」

「まあ立ち話もなんだ、座ろうな？」

「……………うん」

舞はさっきまで座っていたベンチにまた座った

「……………さて、舞。あんた成長したな。何歳になった」

「１７になった」

「そうか１７か、ほんと、でっかくなりやがって」

「……………」

「ただ……………なんで死んじまったんだ……………」

「……………ごめんなさい……………」

「謝らなくていいさ、あんたも死にたくて死んだ訳じゃないはずだ」

「……………教える……………」

「ん？何をだ？」

「私が死んだ理由、教える……………」

「……………いいのか？」

「ひさ子お姉ちゃんなら、いい」

「そうか……………」

回想

「いつてきまーす」

あの日私は、いつも通り、学校へ行き、勉強して、部活して、楽し

んでいた。

こんな日々が毎日続くと思っていた。

「ただいまー！」

部活をした後夜に帰ってきた私は違和感を覚えた。

家が静かすぎる。

テレビの音も、お母さんとお父さんの声も聞こえない

「おかーさん？」

私は、リビングの扉を開け、回りを見渡したとき、目に入ってきたのは

「え……………」

血だらけのお母さんだった

いきなりの事で何が起きたのかわからなかった

「……………お母さん？」

お母さんに触ったらすごく冷たくて、不気味だった

「……………？なんで……………？包丁が刺さってるの……………」

私は素手で、お母さんに刺さっていた包丁を抜いた。

「……………」

私は怖くなって包丁を手放し、鞆を持って家から飛び出した。

「……どうしたらいいの……！？」

私はとにかく走った。

どこに行けば良いかわからなくなった

私は遠くに逃げようとした。

お金ならある、無くなってもバイトして手に入れればいい。

その考えのもと、私は逃げた。

——数週間後

……最悪の事態になった。

警察が私を容疑者と断定し、指名手配までしてくれやがった。

無論、私はなにもしていない。

したといえば、お母さんに刺さっていた包丁を抜いたぐらいだ。

でもどうであれこれで帰る場所が無くなった。

私はバイトを辞め、また逃げることに専念した

髪も元々真っ黒だったのをド派手に白く染め、油性ペンで目の下に泣きぼくろを作った。

これで大丈夫だと思って、逃げた。

だけど甘かった。

「君、こんな遅くに何やってるの」

パトロール最中の警察官に声をかけられた

「……言わないといけないですか」

「まあ、ね」

「……じゃあ言いますよ……私は指名手配されて警察から逃げている最中よっ！」

思いきり警察官の頬を殴り飛ばした

そして、走って逃げようとした

バン！

鳴り響いた銃声。それと同時に、左脚に激痛が走った

「……！しまった……！」

警察官は当てるつもりはなかったらしい

でもこのままだと捕まる……

「死ねない……！」

私は無実なんだ。それを証明しなくちゃいけない。

そう思うと撃たれた脚に力が入った

私は立ち上がり、左脚の痛みをこらえながら、逃げた。

なんとか警察から逃げられたのだが、私の体はもう限界に達していた。

「目が……はあはあ……霞んで……」

私はもうだめだという事を悟り、座り込み、今までの事を思い出していた。

あ……これって走馬灯っていうのかな……？

じゃあ私、本当に死んじゃうのかな……

あの日、狂わされた人生。楽しい人生のはずが、ただ逃げ惑うだけの人生に変わった。

できることなら、私の手で、犯人を捕まえたかったけど、今となっ

てはもう無理だ。

どうして、私ばかりこんな目に遭うんだろう……

「私は……なんにも……してないのに……なんで……なんで……こんな……目に……」

それが私が最後に口にした言葉だった。

「……そんなことがあったのか」

舞の口から語られた過去に、少々動揺しながらも、ひさ子はしっかりと舞の話の聞いていた

「うん……」

うつむきながらかなり小さな声で舞は返事した。

そんな舞を見て、ひさ子は悲しくなった。

ひさ子の知っている舞はいつも笑っていて、どう考えても不幸せな人生を送るとは思えなかった。

今、自分が舞にしてやれることは何か、ひさ子は考えを巡らせた。

そして、思いついた方法がひとつだけあった。

ひさ子はそつと舞を抱きしめた

「……………ひさ子お姉ちゃん？」

「舞、辛かったんだな」

「……………！」

ひさ子はその言葉をかけた瞬間、舞の目から、涙が溢れだした。

「うええ……………！うわああ……………！」

その場に舞の泣き声だけが、響き渡った

—————
数分後

「……………落ち着いたか？」

「うん、だいぶ落ち着いた」

「そうか、じゃあ食堂に戻るか」

「うん」

舞はそう返事をしたあとひさ子についていくように食堂に戻った。

ヌクモリ（後書き）

おまけ

入江「ひさ子さんてさあ……」

関根「ロリコン？」

ひさ子「Nooooooooo!」

ひさ子のロリコン疑惑が浮上した日だった。

キャラ説。(トリセツみたいな感じで)(前書き)

書くの忘れてたから今書いときます

キャラ説。(トリセツみたいな感じで)

書くの忘れてたんで書いとかないと……………

入野舞

年齢 17歳

体重 入野「聞いてどうするの?」

身長 167センチメートル

生前 第四話参照。

使用武器 薙刀 スチエッキン・マシンピストル

体つき 胸が大きい。本人は薙刀を振るのに邪魔だと思っている

備考

幼い頃、ひさ子に可愛がってもらっていた。

その時、ひさ子の事をお姉ちゃん付けで呼んでいた

死後の世界でもそれは変わらず、ひさ子の事をお姉ちゃん付けで呼んでしまう

そのため、ひさ子にはロリコン疑惑が浮上してしまい、ひさ子の悩みの種が増える結果になってしまっている

同じ長物を武器としているせいか、野田から異様なまでのライバル心を燃やされており、舞はそれを『気持ち悪い』の一言で一蹴している

本人は自覚していないが戦線メンバーの中で、アホの部類に入っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6423y/>

Angelbeats! HEAVENS BATTLE

2011年12月16日17時57分発行